

# トリノ・エジプト博物館所蔵 Papyrus Turin Cat. 1885 の神官文字に 関する覚え書き

永井 正勝<sup>†</sup>

キーワード： ヒエラティック、ラメセス4世、王家の谷、平面図

## 1 はじめに

筆者は2012年11月にイタリアのトリノ・エジプト博物館を訪問し、パピルス写本の Papyrus Turin Cat. 1885 を小型カメラで撮影した。これは本格的な資料調査を目的としたものではなく、神官文字表記の類例を広く収集する目的で簡易に撮影したものであった<sup>1</sup>。ところが、帰国後に本パピルスの研究論文として有名な Carter & Gardiner (1917)に目を通したところ、Carter & Gardiner (1917)に提示されている神官文字の解釈にいくつかの疑問点が生じることとなった。そこで本稿では、本パピルスの解読を行うための予備的な考察として、筆者が撮影した写真を利用して、Papyrus Turin Cat. 1885 の神官文字に関する疑問点をまとめておきたいと思う。

## 2 Papyrus Turin Cat. 1885 の研究史とその問題点

### 2.1 Papyrus Turin Cat. 1885 について

---

<sup>†</sup>筑波大学人文社会系

<sup>1</sup> 本調査は JSPS 科研費 24520452 「高精細画像と XML データを用いた古代エジプト語文書の言語記述アーカイブズの構築」(代表：永井正勝)の助成を受けて実施したものである。

Papyrus Turin Cat. 1885 (図 1)は新王国時代の王であるラメセス 4 世の墓<sup>2</sup>の平面図とその注記を記したパピルスである。ただし、注記にラメセス 4 世という記載は見られず、描かれている墓の形状や記載内容から、ラメセス 4 世の墓の平面図であると推定されている。

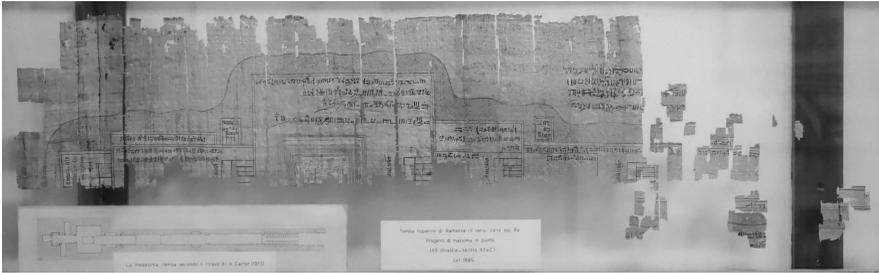


図 1 : Papyrus Turin Cat. 1885 の全体(表面)

本パピルスはフランス総領事を務めたトリノ出身のヴェルナルディーノ・ドロヴェッティ(Bernardino Drovetti)によって、1820年にデイル・エル・メディーナにあるアメンナクトの家で発見された。Carter & Gardner (1917)によると、本パピルスの法量は、高さ約 24.5cm×長さ約 86cm であるが、現在では右端と下部が欠損しており、本来は高さ約 45cm×長さ約 150cm であったと推定されている<sup>3</sup>。

本パピルスを記した書記はアメンナクトであり、トリノ・エジプト博物館の公式カタログ(Vassilika 2012: 104)によると、ラメセス 4 世の治世時代(紀元前 1152-1145 年頃)に作成された。書記アメンナクトは、トリノ・エジプト博物館所蔵の Papyrus Turin Cat. 1869(ワディー・ハンママートの地図)を記したことでも知られている。

<sup>2</sup> ラメセス 4 世の墓は「王家の谷(King's Valley)」に存在しており、KV2 という番号整理が与えられている。

<sup>3</sup> トリノ・エジプト博物館の公式カタログ(Vassilika 2012: 104)によると、本パピルスの法量は高さ 35cm×長さ 120cm となり、Carter & Gardner (1917)が記載した数値と一致していない。

## 2.2 Turin Cat. 1885 の研究略史

Papyrus Turin Cat. 1885 には墓の平面図とその注記が記されている。注記された内容は、部屋や通路などの名称とその実測値、そして装飾の有無などである。

本パピルスの模写を世界で初めて公開したのは、レプシウス(K.R. Lepsius)である。Lepsius (1867)の図には、①墓の平面図の模写、②神官文字の模写、③パピルスの内容から復元される墓の平面図と断面図、④ナポレオンの『エジプト』に掲載された墓の平面図と断面図、が記されている。このうち①と②はパピルス全体のトレース図というような見栄えになっているが、2.3 で後述するように、トレース図そのものではない。なお、Lepsius (1867)の本文には、神官文字の聖刻文字翻字が掲載されている。

Lepsius (1867)以降、いくつかの論考が発表されているが、現在まで決定的な影響力を持つものは、カーター(H. Carter)とガーディナー(A. H. Gardiner)による論考(Carter & Gardiner 1917)である。そこに掲載されている図では、Lepsius (1867)の図の①と②はそのままに、③と④の部分が、カーターが作成したものに置き換えられている。また、本文には、Lepsius (1867)と同様に、神官文字の聖刻文字翻字が掲載されている。Carter & Gardiner (1917)の特徴は、レプシウスが掲載していなかった表面のテキスト P と裏面のテキスト、ならびにカーター自身による墓の測量結果が記されている点にある。

## 2.3 問題点

本稿では墓の平面図や測量値に関する考古学・建築学的な検討は行わず、神官文字のみに着目する。文字資料の部分は、Lepsius (1867)ならびに Carter & Gardiner (1917)の両者とも、(a)神官文字の模写と(b)聖刻文字翻字を掲載している。そのうち、Carter & Gardiner (1917)に掲載されている神官文字の模写は Lepsius (1867)に掲載されたものを転載したものであるため、内容は同一である。それに対して、聖刻文字翻字は Lepsius (1867)と Carter & Gardiner (1917)とで異なる部分が多い。

本稿の筆者が確認した限り、Lepsius (1867)の作成した聖刻文字翻字には不備が多いが、Carter & Gardiner (1917)の研究によってかなり正確な翻字に

修正された。とは言うものの、Carter & Gardiner (1917)に掲載されている聖刻文字翻字にも若干ではあるが疑問に感じられる箇所がある。

このように、Carter & Gardiner (1917)の作成した聖刻文字翻字に検討の余地が残されているわけだが、このような状況に陥っている理由を2つ指摘しておきたい。その1つは、多くのエジプト学者が原資料の聖刻文字を読まずに研究を行っていることにある。つまり、実際の文字を確認することなく、他の研究者が聖刻文字に翻字したものを「資料」として使用して研究を行うことがエジプト学では常態となっている。その結果、聖刻文字翻字を疑うという姿勢、言い換えれば、翻字のコレクションを行うという姿勢がエジプト学では希薄になっている。

聖刻文字翻字に検討の余地が残されている2つ目の理由として、分析に耐えるような資料の写真が公開されてこなかったということがある。Lepsius (1867)や Carter & Gardiner (1917)には写真図版が添付されておらず、パピルスの模写が添えられているのみである。ところが、この模写は正確なトレース図ではなく、かなりの箇所で正確さに欠けるものとなっている。特に、神官文字の模写には誤りが散見される。Carter & Gardiner (1917)において、Lepsius (1867)の作成した平面図と断面図の再検討が行われているが、神官文字の模写については、再検討がなされなかった。それにもかかわらず、学界に影響力を持つガーディナーが利用した図であったために、Lepsius (1867)の模写すなわち Carter & Gardiner (1917)の転載した図が今日でも決定的な影響力を持っており、様々な研究・著作で引用されている<sup>4</sup>。このような状況を改めるためにも、正確なトレース図あるいは高精細な写真の公開が待たれるところである<sup>5</sup>。

<sup>4</sup> たとえば Papyrus Turin Cat. 1885 の英訳を掲載した Mc Dowell (1999)には、Carter & Gardiner (1917)に掲載された図のトレースが掲載されている (figs. 23-24)。

<sup>5</sup> Papyrus Turin Cat. 1885 は著名なパピルスであるため、インターネットで検索すれば数多くの画像を見つけることができる。それらの画像を利用して神官文字を確認することもできるが、解像度の低い画像が多いため本格的な文字研究を行うのは難しい。

### 3 分析資料

4 節ならびに 5 節では、筆者の撮影した Papyrus Turin Cat. 1885 の表面の写真を元データとして使用して Carter & Gardiner (1917) に掲載されている聖刻文字翻字の修正ならびに神官文字に見られる字形の違いの指摘を行う。

写真資料には、2012 年 11 月 2 日-4 日に筆者が撮影した写真を使用する。撮影に使用した機材は、Sony 社製 DSC-RX100 である。はじめに述べたとおり、筆者の撮影した写真はメモ用の記録として撮影したものであり、高精細な画像ではない。また、本稿では複数の写真から画像を切り出しているが、ISO、F 値、焦点距離、絞り値、ホワイトバランス、撮影倍率、光量は一定ではなく、掲載に関して縮尺の統一も図っていない。

Papyrus Turin Cat. 1885 に見られる神官文字資料には、テキスト番号が与えられている。本稿では Carter & Gardiner (1917) で使用されている番号(X-a ~ P-4)を利用する。なお、本パピルスには裏面にも文字が記載されているが、実見ならびに写真撮影を行うことができなかったため、表面のテキストのみを分析の対象とする。

## 4 Carter & Gardiner (1917) に掲載されている聖刻文字翻字の検討

### 4.1 聖刻文字翻字の検討

本節では Carter & Gardiner (1917) に掲載されている聖刻文字翻字に関する疑問点を提示する。検討する語句は、*md.t* 「奥行」、*ntr.w* 「神々」、*hm=f* 「陛下」、*psd.t* 「九柱神」、*ꜥt tn* 「この部屋」の 5 つである。

#### ① *md.t* 「奥行」の表記

*md.t* 「奥行」の語は W-d と Z-c の 2 カ所で使用されている(図 2-a)。Carter & Gardiner (1917) はこの語を構成する文字を 252[V21]<sup>6</sup>と判断している(図 1-b)。だが、実際の表記は 252-200B-575 [V21-Z7-X1] が妥当である(図 2-c)。

<sup>6</sup> 252 [V21] は、神官文字番号 252、聖刻文字番号 V21 を示す。神官文字番号は Möller (1927) に、聖刻文字番号は Gardiner (1957) に従う。

a) 神官文字



W-d

Z-c

b) Carter &amp; Gardiner (1917)



c) 新提案

図 2 : *md.t* 「奥行」 の表記

## ② 「神」 を示す限定符の表記

「神」を示す限定符は、*ntr.w* 「神々」(Z-c)、*hm=f* 「陛下」(Y-b)、*psd.t* 「九柱神」(Y-b)の3カ所で使用されている。このうち、*ntr.w* 「神々」(Z-c)と*hm=f* 「陛下」(Y-b)を示したものが図3である。これらの語に含まれている「神」を示す限定符をCarter & Gardiner (1917)は45[A40]と判断しているが(図3-b)、正しくは188B[G7]である(図3-c)<sup>7</sup>。

a) 神官文字

Z-c [*ntr.w*]Y-b [*hm=f*]

b) Carter &amp; Gardiner (1917)



c) 新提案



図 3 : 「神」 を示す限定符の表記

<sup>7</sup> Carter & Gardiner (1917)は*s3btj* 「シャブティ」(Z-b)の限定符も45[A40]と判読している。原資料では文字に欠損が見られるため明確ではないが、この語の限定符も188B[G7]である可能性がある。

③ *psd.t* 「九柱神」の表記

*psd.t* 「九柱神」は Y-b の 1 カ所で使用されている(図 4-a)。

## a) 神官文字



Y-b

## b) Carter &amp; Gardiner (1917)



## c) 新提案



図 4 : *psd.t* 「九柱神」の表記

Carter & Gardiner (1917)はこの語の冒頭の文字を 573[N10]、そして限定符を 45[A40]と解している(図 4-b)。「神」の限定符で確認したように、限定符は 45[A40]ではなく、188B[G7]が正しい。また、冒頭の 573[N10]は 304[N6]と判断すべきであろう(図 4-c)<sup>8</sup>。

④ *ꜥ.t tn* 「この部屋」の *tn* 「この」の表記

W-d に *ꜥ.t* 「部屋」の記載が見られる。その後続く部分は文字の判読が難しい(図 5-a)。Carter & Gardiner (1917)はこの部分を *tn* 「この」575-331[X1-N35]と判断しているが(図 5-b)、神官文字を見る限り、575-331[X1-N35]と判断するのは妥当ではない。Lepsius (1967: 6)はこの箇所を欠損扱いにして、あえて訳出していない。文字が不鮮明なために文字種の全体を断定するには至らないが、下方には 105[D40]が書かれているように見える(図 5-c)。

<sup>8</sup> 573[N10]と 304[N6]の識別について、Möller (1927)のリストには揺れがあり、304[N6]と思われる事例が 573[N10]に加えられている。

a) 神官文字



W-d

b) Carter &amp; Gardiner (1917)



c) 新提案

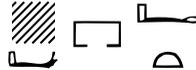


図 5 : 𓂏t 「部屋」 に続く語の表記

## 4.2 小結

5つの語句について Carter & Gardiner (1917) が提示した聖刻文字翻字に関する疑問点を提示した。文意に変更を迫る箇所は④𓂏t tn 「この部屋」のみであるが、文字種の同定は辞書における表記例の記載にも影響を与えることでもあり、重要な基礎作業だと言える。

## 5 パピルスに見られる字形の検討

### 5.1 字形の検討

Papyrus Turin Cat. 1885 の神官文字テキストは、W, X, Y, Z, P に区分されている。これらのうち、P を除く W, X, Y, Z は墓の内部空間に位置する部分に記されている。それに対して、P は墓の外部に相当する場所に書かれており、しかも、文字の天地が反転されている。このことは、W, X, Y, Z と P とで、表記されたタイミングや書記が異なる可能性のあることを示唆している。このような点を踏まえ、本節では、P のテキストの字形が他のテキストの字形と異なるか否かを検討する。

P には 36 種類の文字種、延べ 92 文字が書かれている。本来であればこれらすべての文字種について W, X, Y, Z の事例と比較すべきであるかもしれない。だが、神官文字の字形は環境によって変化することが多く、やみ

くもに字形のみを確認すればよいというものではない。そこで本稿では同一の語に見られる文字を比較の対象とする。

P には 21 種類の語種、延べ 45 語が書かれている。21 種類の語のうち、*smhy*「左」、*wmy*「右」、*ph*「後部」、*hnw*「内部」、*sdb.t*「ホール」の 5 種類は他のテキストに見られないため、分析の対象から除外する。残る 16 種類の語のうち、文字の字形に違いが見られた 7 種類の語、5 種類の文字を以下に扱うことにする。

① *s.t*「場所」に見られる 383[Q1]

*s.t*「場所」の語は P-2, Z-b, Z-c の 3 カ所で使用されている(表 1)。いずれも 383-575-340[Q1-X1-O1]から構成される。この語を構成する最初の文字 383[Q1]は、P-2 のみ形状が異なり、縦線が 2 本書かれている。これをタイプ A とする。Z-b と Z-c の 383[Q1]では縦線が 1 本のみとなる。これをタイプ B とする。このように、P-2 のみ 383[Q1]の字形が異なる。

表 1 : *s.t*「場所」に見られる 383[Q1]の字形とその分類

	テキスト		
	P-2	Z-b	Z-c
字形			
分類	A	B	B

② *nbw*「黄金」に見られる 419[S12]

*nbw*「黄金」は P-1, P-4, Y-b, Y-c, Y-d の 5 カ所で見られる(表 2)。いずれも 419[S12]によって示されている。

P1 と P4 の 419[S12]は上端が角張っており、中央の円弧が上端に接している。これをタイプ A とする。Y-b では両端の縦線が外側に反っている。これをタイプ B とする。Y-c と Y-d では、上端が角張っており、内部の円弧が省略された表記となっている。これをタイプ C とする。

表 2 : *nbw* 「黄金」に見られる 419[S12]の字形とその分類

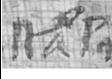
	テキスト				
	P-1	P-4	Y-b	Y-c	Y-d
字形					
分類	A	A	B	C	C

このように 419[S12]には、明確に異なる 3 つのタイプが存在する。しかも、テキスト P の 2 例が他のテキストの事例と異なるばかりか、同一のテキストとして扱われている Y-b, Y-c, Y-d においても字形が明確に異なっている。Y-b から Y-d の文字全体を見る限り、書記が異なっているようには思われない。タイプ B とタイプ C は同一の書記が書いたものと想定される。

### ③ *st3-ntf* 「傾斜路」に見られる 519[V2]

*st3-ntf* 「傾斜路」は P-1, P-4, Y-c, Z-b の 4 カ所で使用されている(表 3)。P-1 と P-4 が 547-519-119/120-340[R8-V2-D54-O1]から構成されているのに対して、Y-c と Z-b には限定符の 340[O1]が付加されていない。

表 3 : *st3-ntf* 「傾斜路」に見られる 519[V2]の字形とその分類

	テキスト			
	P-1	P-4	Y-c	Z-b
字形				
分類	A	A	B	C

P-1 と P-4 に見られる 519[V2]は 340[O1]の手前で止まっている。これをタイプ A とする。Y-c の 519[V2]は、基盤となる斜線が 119/120[D54]の左側まで伸びている。これをタイプ B とする。Z-b でも斜線が 119/120 [D54]

の左側まで伸びているが、文字の上端が輪になっていない。これをタイプ C とする。

*st3-ntṛ* 「傾斜路」については、テキスト P の事例のみ、519[V2]の字形が異なるばかりか、語の綴りも他のテキストと異なっている。

④*rsy* 「南」に見られる 566/582[Aa2]<sup>9</sup>

*rsy* 「南」は P-2, Z-b の 2 カ所で見られる(表 4)。いずれも、290-560-324-558-566/582-561[M24-Z4-N23-Z1-Aa2-Z2]から構成される。

表 4 : *rsy* 「南」に見られる 566/582[Aa2]の字形とその分類

	テキスト	
	P-2	Z-b
字形		
分類	A	B

566/582[Aa2]の字形は、P-2 に見られるように、横棒が貫徹するタイプ A と、点が左右に付加されるタイプ B に分かれる。

⑤459[V22]

459[V22]は、助数詞を作る形態素 *r-mḥ* 「～番目の」、動詞 *mḥ* 「満たす」、*mḥ* 「腕尺」の 3 種類の語・形態素で使用されている(表 5)。

*r-mḥ* 「～番目の」は P-4, W-b の 2 カ所で見られ、いずれも 91-459-538[D21-V22-Y1]から構成される。

*mḥ* 「満たす」は W-b, X-b, Y-b, Z-b の 4 箇所で使用しており、X-b を除く 3 例は 459-538[V22-Y1]から構成される。X-b では、459-538[V22-Y1]の後に 3 人称女性形の状態形接辞 *tw*(575-200B[X1-Z7])が付加されている。

<sup>9</sup> 聖刻文字の Aa2 に対応する神官文字として、Möller (1927)は 566 と 582 の 2 つを登録している。本稿の筆者の考えでは 566 と 582 は同一の文字素であるが、Möller (1927)は *hsb* で使用される文字を 566、*wt* で使用される文字を 582 とし、両者を区別している。

表 5 : 459[V22]の字形とその分類

	テキスト							
	P-4	Q-1	W-b	X-b	Y-b	Y-c	Y-d	Z-b
字形 「～番目の」								
分類	A		C					
字形 「満たす」								
分類			C	C	C			C
字形 「腕尺」								
分類		B				C	C	

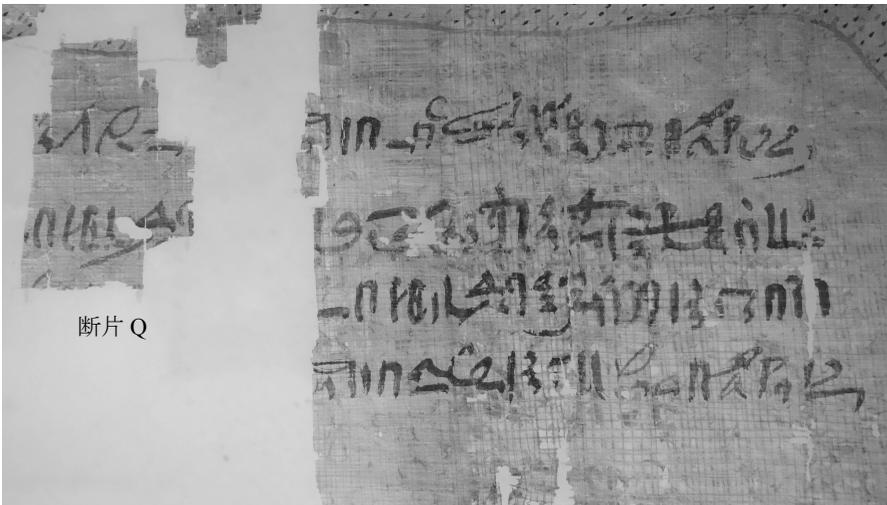


図 6 : テキスト P(右側)と断片 Q(左側)

*mh* 「腕尺」については状況がやや複雑である。Y-c, Y-d, Y-d の 3 例は 459-99[V22-D36]から構成されている。そして、これは Carter & Gardiner (1917)の P に含まれていないものであるが、実際の展示を見ると、P-1 の左横に断片がマウントされている(図 6)。この断片が P に付随するものである可能性があるものの、断定することはできないため、本稿ではこれを断片 Q と呼ぶことにする。断片 Q の 1 行目(Q-1)に見られる *mh* 「腕尺」の綴りは、459-538[V22-Y1]あるいは 459-99[V22-D36]である。

次にタイプを確認する。P-4 の字形のように全体が輪のようになる形状をタイプ A とする。タイプ A は、左側の上端から筆が入り、輪を描いて下方に筆をはらっている。Q-1 の字形はタイプ A に近いが、斜線がやや長いいため、タイプ B としておく。撮影した写真を確認したものの、写真の解像度が不足しているために断言は出来ないが、タイプ B は下から筆が入り、上方に抜けているように見える。タイプ C は斜線が長く表記され、輪が小さくなるタイプである。下方から筆が入り、上方に抜けている。

459[V22]の字形について、3 種類の語・形態素を用いて確認を行ったところ、形状と筆の入り方において、P-4 のタイプ A が W-b, X-b, Y-b, Y-c, Y-d, Z-b のタイプ C と異なることが判明した。

## 5.2 小結

5.1 で検討した結果をまとめたものが表 6 である。459[V22]のタイプ C は W-b と Y-d で 2 例ずつ確認されるが、表 6 では 1 つのみ示している。

表 6 を見る限り、言い換えれば、本節で扱った 383[Q1], 419[S12], 519[V2], 566/582[Aa2], 459[V22]を見る限り、P の字形が他のテキストと異なっていることがうかがえる。ただし、この結果には留意が必要である。その理由の 1 つ目は、これらの字種以外に明確な違いを確認することができなかったことにある<sup>10</sup>。それゆえ、P に見られるすべての文字において、その字形が他のテキストと異なっているということではない。また、2 つ目の理由は、

<sup>10</sup> *p3* 「定冠詞」は W-c, X-c, Y-c, Y-d, Y-d, Z-b, Z-e, P-1, P-4 の 9 箇所で見られる。P-1 と P-4 のみ、やや字形のタイプが異なるように思われるが、他のテキストとの差は明瞭ではない。

Y の内部、あるいは Y と Z とで字形が異なる例もあり、P 対その他という単純な二項対立が見られるわけではないということである。

表 6：字形分析の結果

		テキスト										
		P			Q	W	X	Y			Z	
		1	2	4	1	b	b	b	c	d	b	c
文字種	383[Q1]		A								B	B
	419[S12]	A		A				B	C	C		
	519[V2]	A		A					B		C	
	566/581[Aa2]		A								B	
	459[V22]			A	B	C	C	C	C	C	C	

このような留意点があるものの、383[Q1], 419[S12], 519[V2], 566/582[Aa2], 459[V22] という 5 種類の文字について確認する限り、P の字形が W, X, Y, Z と異なることを認めることができる。ただし、この違いが同一の書記による共時的な表記揺れであるのか、あるいは同一の書記の筆記時期に基づく差であるのか、それとも書記の違いであるのか、現在のところ断定することはできない。

## 6 おわりに

Papyrus Turin Cat. 1885 の研究は Lepsius (1867) を嚆矢とし、150 年ほどの歴史を持つ。この間、本パピルスの存在は、ラメセス 4 世王墓の平面図を記したパピルスとして様々なところで言及されてきた。それにもかかわらず、神官文字の判読については Carter & Gardiner (1917) 以降、本格的な検討が行われることなく、今日に至っている。本稿では、Carter & Gardiner (1917) の論考からおよそ 100 年振りに、神官文字の新しい判読案を示すとともに、テキスト P の字形に他のテキストとは異なる特徴が見られることを新たに指摘することができた。

エジプト学においては聖刻文字翻字を用いて研究を行うことが常態となっているが、言語研究であれ、歴史研究であれ、宗教研究であれ、およそテキストを読むすべての者は、翻字テキストではなく、原資料の神官文字を確認すべきであろう。

【参考文献】

- Carter, Howard and Alan H. Gardiner (1917) 'The tomb of Ramesses IV and the Turin plan of a royal tomb'. *Journal of Egyptian Archaeology* 4: 130-158.
- Mc Dowell, Andrea G. (1999) *Village life in Ancient Egypt: Laundry lists and love songs*. Oxford: Oxford University Press.
- Gardiner, Alan H. (1957) *Egyptian grammar: Being an introduction to the study of Hieroglyphics*. 3rd. edition. Oxford: Griffith Institute.
- Möller, Georg (1927) *Hieratische Paläographie*. Band II. Leipzig: J.C.Hinrichssche Buchhandlung.
- Lepsius, Karl R. (1867) *Grundplan des Grabes Ramses IV in einem Turiner Papyrus*. Abhandlungen der königlichen Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Berlin: Dümmler
- Vassilika, Eleni (2012) *Masterpieces of the Museo Egizio in Turin: Official guide*. Firenze: SCALA.

# A short note on the hieratic scripts of Papyrus Turin Cat. 1885

Masakatsu NAGAI

In this paper, the author, first compared the hieroglyphic transcriptions for Papyrus Turin Cat. 1885 that H. Carter and A. H. Gardiner presented in their article, “The Tomb of Ramesses IV and the Turin Plan of a Royal Tomb,” in the *Journal of Egyptian Archaeology* 4 (1917) with the photographs of the hieratic papyrus that the authors took, and offered the following suggestions:

- 1) spelling of *md.t* “depth” is not Möller’s No. 252 but Nos. 252+200B+575;
- 2) the determinative of *ntr.w* “gods,” *hm=f* “his majesty,” and *psd.t* “Ennead,” is not No. 45 but No. 188B;
- 3) the first sign of *psd.t* “Ennead” is not No. 573 but No. 304;
- 4) *tn* “this” of *ˁ.t tn* “this room” in Text W-b is unacceptable.

Second, the author then investigated the details of hieratic forms and pointed out that the sign forms of Nos. 383, 419, 459, 519, and 566 in Text P show differences from the forms of those signs in other texts.

Third, the author asserted that the figure of the papyrus presented by R. Lepsius in his *Grundplan des Grabes Ramses IV in einem Turiner Papyrus* (1867) and that was re-used in Carter & Gardiner (1917) is lacking precision in that many of hieratic signs are deformed.

Finally, the author also asserted the importance of checking hieratic scripts and the unreliability of depending on hieroglyphic transcriptions.

*Faculty of Humanities and Social Sciences*

*University of Tsukuba*

*1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8571, Japan*

*E-mail: nagai.masakatsu.ft@u.tsukuba.ac.jp*